桜の花が咲く頃に

律花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜の花が咲く頃に

【Ｎコード】
Ｎ５３３９Ｒ

【作者名】
律花

【あらすじ】
ずっとつづくと思っていたしあわせな毎日。そこにおとずれた小さな変化。
そして、わたしは気づいてしまった。
大好きなひとのこころが、もう自分にはないんだってことに。

1

あの日も今日みたいに、春のおとずれを予感させる日差しのあたたかい日だった。

ぽつぽつと蕾がふくらみ始めた校庭の桜の下。着古した制服に身を包んだわたしは、卒業式の日、三年間同じクラスだった友達に想いを告げた。

「わたし、祐樹のこと、わりと好きなんだよね。話してて楽しいし。だから、えっと……もし祐樹がよかったらだけど、付き合わない？」

頭の中は真っ白で、口はからからに乾いていて、心臓はどくんどくんとうるさいくらいで。

けっこう好き、だなんてうそ。ほんとうは、大好きだった。

いつからかはわからない。気がつくとわたしの目は、いつも祐樹の姿を追っていた。自分に向けられるあどけない笑顔が嬉しくて、自分以外の女の子と親しそうにしているのを見ると、胸が痛くなった。

けれど、そんなことを口にするのは恥ずかしくて。

可愛げのない告白しかできなかったわたしを、祐樹は笑って受け入れてくれた。じゃあ付き合ってみるかな、と。

嬉しかった。別々の大学に行くことになってしまったけれど、これからは恋人としていっしょにいられるんだって思うと、ほんとうにしあわせだった。

あれからもう、二年が過ぎた。

2

「今日、バイト先で春佳の友達に会ったよ」
やっと夜風が涼しくなり始めたある日。いつものように携帯でしゃべっているとき、祐樹が言った。
「深山さんって、よく春佳が話してる子だろ？」
ああ、とわたしは声を洩らした。
深山さん――深山秋穂は、大学に入ってできた最初の友達だ。入学後すぐに入ったサークルで知り合って、学部が同じだとわかってからはよくいっしょに行動している。
祐樹が最近、居酒屋でバイトを始めたことは聞いていた。けれど、まさかバイト先が秋穂と同じだとは思っていなかった。
「そうだよ、偶然だね。なんか話した？」
「や、自己紹介っぽいことしたぐらい。深山さんシフト入れまくってるみたいだし、これからまた話す機会はあるだろうけど」
「そっかぁ。秋穂いい子だから、たぶんすぐ仲良くなれると思うよ」
「あれ？　妬かないんだ」
茶化してくる祐樹に、わたしは笑って応えた。
「誰が妬くかっての」
ほんとうは、ちょっと不安だった。可愛くてやさしくて、がんばり屋な秋穂。同じバイト先になんてなったら、祐樹が心変わりしてしまうんじゃないかって。
けれど、口には出さなかった。あからさまに嫉妬なんかしたって祐樹を束縛してしまうだけだし、第一みっともない……そんなプライドに、邪魔をされたからだった。
それからも、いつもと変わらない日々がつづいた。
祐樹とはほとんど毎日メールや電話をして、週に一度はデートもした。

ふたりで話をしているとき、たまに秋穂のことが話題に上がった。祐樹がバイト先での秋穂の様子を話したり、逆にわたしが大学で秋穂としゃべったことを話したり。秋穂の名前が祐樹の口から出るたびに、わたしはほんのすこしだけ、こころがかき乱されるのを感じた。そんな小さい自分がいやで、恥ずかしくて、表向きはなんてことないってふうを装ったけれど。

当たり前の毎日が変わり始めたのは、まだお正月ムードの濃い一月上旬のことだった。

その日、わたしと祐樹、秋穂の三人で新年会をすることになった。みんなお互いに面識はあったけれど、三人がひとつの場所に集まるのは初めてだった。

お酒を飲みながらたわいのない話に盛り上がって、すっかり夜が更けてしまった帰り道。秋穂が使うのは、わたしと祐樹とは違う鉄道だった。

「駅まで送っていくよ。ね、祐樹」

「うん、もう夜遅いし、遠慮しなくても」

「大丈夫だって。せいぜい十五分で着くし」

駅の構内へと通じる階段の前。送っていくと言うわたしたちを制して、ひと気のまばらな歩道を歩いてゆく秋穂を見守る祐樹の目――それを見たとき、いままでにない不安が生まれた。水面に描かれる波紋みたいに、その感情は胸の中を広がっていって。

わたしは思わず祐樹の手をとった。冷えた手を包みこむみたいに、指を絡ませる。

祐樹ははっとわたしを見て、それからためらったような間のあと、黙ってわたしの手を握り返してくれた。

3

大学のラウンジは、昼休みになると昼食をとる学生でごった返している。運よく窓際の小さなテーブルが空いたので、わたしと秋穂はそこに向かい合って腰かけた。

外を見れば、厚着をした学生が身体を縮めるようにして行き交っていて、ときどき吹きつける強風は窓ガラスをかたかたと揺らす。いかにも寒そうで、屋内にいるのに軽く気が滅入ってしまった。

「あーあ、早く春休みにならないかな」

まだ冬休みが明けたばかりなのに、ついそんなことをつぶやいてしまう。

「朝寒すぎて、一限目あるとき大学来るのつらいよね。あたし、布団から出たくないって欲求と毎日戦ってるもん」

「わたしは実際、欲求に負けて何回もサボっちゃった。まぁ、期末にレポート出せばいいだけの般教とか、毎回試験問題変えない先生の講義とかだし、たぶんいけるとは思うんだけど」

嘆息するわたしに、秋穂がふわりと笑って言った。

「だったら大丈夫だよ。そんな心配することないって」

「でもさ、今学期こそは絶対授業フル出席しようと思ってたのに、けっこうサボったからなぁ。意志弱すぎだろわたし、って思っちゃって」

勉強がんばろう、って学期はじめにはいつも思うんだけど、どうしてもその意気込みが長くつづかない。それで結局、試験直前になってから徹夜で知識を詰め込むことになってしまう。……秋穂はぜったい、そんなことないんだろうな。

「まぁまぁ、これからがんばればいいじゃん。休んだぶんは文献でも補えるだろうし」

わたしはあいまいに相づちを打って、ペットボトルのストレート

ティをふた口飲んだ。あたたかさがのどを通って、おなかに落ちてくる。周囲のざわめきが耳を打つ。
「秋穂、やっぱり春休みもバイト忙しいの？」
「うん、スケジュール表とかやばいことになってるよ。正社員並みじゃない？　って友達に言われるぐらい」
なんだかおかしそうに、秋穂はそう言った。
奨学金では足りない学費を稼ぐために、秋穂は空き時間の大部分をバイトに費やしている。すごく忙しそうなのに、講義をサボったことは一回もないらしい。いつもきっちり教授の話を聞いて、丁寧にノートをまとめて、毎学期すごく優秀な成績をおさめている。
すごいなぁって尊敬すると同時に、自分はこんなのでいいのかな、と引け目みたいなものを感じてしまうことも多い。勉強に励むわけでも、それほどサークルの活動に打ち込んでいるわけでもなくて。だけど変わりたいって思いはいつだってあやふやで、結局わたしはなにもせずにこれまでの時間を過ごしてきた。
「毎日バイトばっかなのに、よくそんなに体力持つよね」
「いやいや、いつも疲労と眠気との戦いだよー。ただ、払った学費のぶん、もととらないともったいないって思っちゃうんだよね。貧乏性かも」
学費なんて全額両親に負担してもらっていて、おこづかい稼ぎ程度のバイトしかしていないわたしに、ぜんぜん嫌味のない口調で秋穂は応える。そして、わたしが抱いているいろんな引け目を吹き飛ばすように、屈託なく笑ってくれる。秋穂のこういうところが、わたしは好きだった。
そのときふと、祐樹のことが頭をよぎった。つい先日、新年会のとき。秋穂を見つめていたその目が、やけにはっきりと思い出される。
――気にしないように、しなきゃ。
わたしは、そう自分に言い聞かせた。

4

夕暮れどき、閉店まで間もない喫茶店はお客さんがほとんどいなくて、閑散としていた。同年代の女の子がふたり、奥の方で会話に盛り上がっている声が聞こえてくる。ときどき、甲高い笑い声が上がる。

「そしたら、サークルの後輩が……」

気がついて、わたしは話をやめた。テーブルの上に投げ出された祐樹の左手に、自分の右手を重ねる。窓から差し込む夕日が、手の甲を淡いオレンジ色に染めていた。

「あ、なに？」

「またぼーっとしてる」

「ごめん、考えごとしてた。後輩が、なんだっけ」

祐樹が申し訳なさそうに、そうたずね返してくる。

「もう、ちゃんとひとの話聞いてよ」

ちょっと語気を強くして言うと、祐樹はもう一度小さく謝った。それからふっと窓の外を見やって、すこしだけ目を細める。暮れてゆく空よりもっと向こうにある、どこか遠いところを見ているみたいだった。わたしには見ることのできない、ずっと遠く。

最初は気のせいかなって思っていたけれど、そうじゃない。祐樹は最近、こんなふうにぼうっとしていることが増えた。それに、普段からそんなにしゃべるほうじゃないけど、この頃はますます口数が減った気がする。

いつからかって記憶をさかのぼると、あの新年会の日に行き当たる。そして、秋穂を見るあの目を思い出してしまう。

わたしはあわてて、いやなほうに進みそうになる思考を振り払った。右手に力を込めると、祐樹はまたこっちに視線を戻してくれた。

――どうしたの？　なんて訊かない。聞きたくない言葉が返って

くるのが、怖い。
「祐樹ってもう、試験終わったんだよね」
声をはずませて訊くと、祐樹はほっとしたように顔をほころばせた。
「まあ、一応。春佳は次の月曜で最後だっけ？」
「うん。一科目だけ、やたら試験が遅いんだよね。早く全部終わらせちゃいたいんだけど」
わたしは肩をすくめて、それから祐樹にたずねた。
「でね、わたしの試験が終わったら、どこか遊びに行かない？　祐樹の行きたいとこ」
祐樹はちょっと考えるそぶりをしたあと、逆に訊き返してきた。
「俺はどこでもいいよ。春佳はどこ行きたい？」
「うーん、すぐには思いつかないけど……あ、そうだ。スキー行きたいかな」
わたしが答えると、祐樹は苦笑して言った。
「春佳、去年スキー行ったとき転んでばっかりだったよな。しまいには『雪の上でこんな動きにくいもの履いて、転ばないほうがおかしい』とか言い出すし」
「転んでたのは最初だけでしょ。最後のほうはちゃんと滑れるようになったじゃん」
「あー、そうだっけ」
祐樹がおかしそうに笑う。わたしもそれにつられて、すこし笑った。
ほんとは、どこでもいいんだよ。祐樹がいっしょにいて、わたしだけを見てくれれば……それだけでいい。
だから、そんな遠くを見ないで。
そう言いたかったけれど、どうしても言えなくて、胸がぎゅっと締めつけられるみたいだった。
無視しようと思えばそうできるような、小さな変化なんだと思う。

祐樹がたまに、前触れなく黙り込んでしまうようになった。ふたりの会話の中に、秋穂の名前が出てこなくなった。それだけのこと。だけど確かに、なにかがわたしたちを隔ててゆくのを感じていた。

5

――このまま時間が経てば、祐樹はまた前みたいになってくれるのかな。

そもそも、祐樹の態度が変わったとか、それが秋穂のせいなんじゃないかとか、全部わたしの思い込みなのかもしれないし。

そんな小さな期待は、すぐ不安に取って代わる。

理屈を超えたものが、思い込みなんかじゃないってわたしに告げる。

「はーるかっ。大丈夫？」

秋穂がわたしの目の前に手をかざす。それでやっと我に返った。

まわりを見ると、試験の終わった教室はぞろぞろと学生が出てゆくところだった。開いたドアの向こうから、「ヤマがはずれた」だとか「絶対落とした」だとか、ざわめきに混じって悲観的な声が聞こえてくる。

「えっ、あ……うん、大丈夫」

「どうしたの？　試験終わって、燃え尽きちゃった？」

いたずらっぽく笑う秋穂に、わたしは苦笑して答えた。

「あはは、そうかも」

わたしは机の上に残された問題用紙を折りたたんだ。出された問題は、三題から二題を選択する方式。前回の試験から日にちが空いていて、勉強時間がそれなりに取れたおかげで、いままで受けた試験の中では一番手ごたえがあった。

「秋穂って、今日もバイトなんだよね」

「うん、そうだよー。帰るの面倒だから、もう大学から直接行くことにする」

「そっかぁ」

問題用紙をクリアファイルにしまい込んでいたとき、また祐樹のことが頭に浮かんだ。
そう言えば、祐樹も今日はバイトって言ってた気がする。ということは秋穂に会うんだろうな……そんなことを考えていたら、いてもたってもいられなくなってしまった。
「祐樹も今日バイトって言ってたなぁ。……そう言えば、祐樹ってバイト先でどんな感じ？　あんまりバイト先でのこと、教えてくれないんだよね」
口実をつくってたずねると、秋穂は小さく首をかしげて、
「んー、厨房とホールだから接点すくないんだけど、うまくやってるんじゃないかな」
それから、ふと頬をゆるめて言葉を継いだ。
「あと、いいひとだなって……まわりに気をつかうのうまいなって思うよ。新しく入ってきた子に、自然に声かけてあげてたりね」
「へえ、そうなんだ」
「いい彼氏でよかったね。ちょっとうらやましい」
冗談っぽく肩をすくめる秋穂に、わたしは不思議に思って訊いてみた。
「そう言えば、秋穂っていままで誰とも付き合ったことないんだよね。なんで？」
「なんでって、それをあたしに訊く？　モテないからに決まってるでしょー」
それは絶対にうそだ。かわいらしい顔立ちをしていて気配りのきく秋穂は、男の子にとても人気がある。わたしが知っている限りでも、同じサークルの男の子がふたり、秋穂に告白をしたらしい。ふたりとも、そっこうでふられてしまったらしいけれど。
わたしの思っていることを読みとったのか、秋穂はばつが悪そうに笑って付け加えた。
「告白してくれるひとも、いないことはないんだけどね。ただ、自分はぜんぜん恋愛感情ないのに、付き合ってもいいのかなって考え

ちゃって……そのひとのこと、嫌いってわけじゃないんだけど」
「ああ、その感覚はなんとなく分かるかな」
以前、別の友達と恋愛観についてしゃべったことがある。そのときの、「付き合っていくうちに好きになることだってあるから、なんとも思ってない相手からでも告白されたらオッケーする」って友達の言葉がなんだかピンと来なくて。「特別好きでもないひとと付き合うって、よくわかんない」と言ったら、お堅いって返されてしまった。
そんなことを、ぼんやりと思い出した。
「じゃあ、秋穂って好きなひとといないの？」
あー、どうなのかな、と秋穂が腕を組んで首をひねる。
「うーん……分かんない。いないのかな？」
「なにそれ」
思わず笑ってしまったわたしに、秋穂は大げさにしみじみとした口ぶりで言った。
「いやー、むずかしいよねぇ、恋愛って。……なんて。あたし、誰とも付き合ったことないのに変だけど」
ほんと、むずかしいね。
わたしはこころの中で、そう返した。
むずかしくて面倒なのに、なんで好きって想いは抑えられないんだろう。

6

降りしきる小雨で、景色が白く煙っている。わたしたちはひとつの傘の下、肩を並べて狭い歩道を歩いていた。こんな夜はみんな外出する気になれないのか、いつもより周囲の人影はすくない。ときどき、車道を走る車のヘッドライトが、闇を切り裂いてゆく。

言葉もなく歩いていると、なんだかいつになく淋しくなった。どうしてかなんて分からない。ただ、この寒さを癒してくれるようなぬくもりが欲しかった。

「ねぇ、キスしよう？」

そう言った声は、白い息といっしょに空気に溶けていった。

「なんだよ、いきなり」

祐樹が視線を落として、ぶっきらぼうにつぶやく。

「だって、最近全然してないし」

三人で飲んだあの日から一ヶ月。わたしたちは一度もキスをしていない。

いつもなら、ふとお互いの気持ちが通じ合ったとき、自然と唇を重ねていた。けれど、近ごろはそんな瞬間がおとずれない。

すぐそばにいる祐樹の目は、とても遠いところを見ているみたいだった。

「……やっぱり、いい」

黙りこくっている祐樹に、顔をうつむけてわたしは言った。

と、祐樹がふいに、傘を持っていないほうの手でわたしを抱き寄せた。息を飲むと同時に、唇がそっと触れ合う。

ひんやりと、雨みたいに冷たいキス。

わたしはゆっくりと、祐樹の身体を押し離した。ゆるゆるとかぶりを振って、なんとか声を絞り出す。

「ごめん……でも、もういいよ」

祐樹はわたしから目をそむけて、ぽつりと言った。
「ごめんな」
――なんで、謝るのよ。
声を荒げて、なじりたかった。気持ちをすべて吐き出してしまいたかった。
けれど、そんなことできなくて。わたしは歩道を先に進んで、後ろを振り返った。
「駅までもうすぐだし、ここでいいよ。送ってくれてありがとう」
立ち尽くしている祐樹にそう言って、また背を向ける。
「待てよ」
祐樹が追ってきて、わたしの腕をつかんだ。濡れるだろ、と自分の傘をさしかけてくる。
つかむ手を思わず振り払って、わたしは声を上げた。
「祐樹、最近おかしいよ……！　いつもなにか考え込んでる感じで……わたしのこと、ちゃんと見てくれてる？」
「……ごめん」
車の走行音と、アスファルトを叩く雨音。それに紛れてしまいそうな声。
祐樹の身体は、右肩だけ雨でひどく濡れていた。きっとわたしのほうに、大きく傘をさしかけてくれていたんだろう。
わたしは祐樹をじっと見据えて、たずねた。自分の声がかすかに震えるのを感じた。
「秋穂のこと、好き？」
とまどったように、祐樹の目が揺れた。
「なんで、そうなるんだよ」
いらだちを含んだ、吐き捨てるような口調で祐樹が言う。
「……冗談。本気にしないで」
わたしは苦笑いをしてみせた。束の間の沈黙が肯定を意味してるんだってことには、気づかないふりをして。

7

あの日以来、祐樹からの連絡が途絶えた。
いつもは適当に頃合いを見て、気の向いたほうが相手に電話やメールをするのだけど――あんな別れ方をしたあとに、自分から連絡をとる勇気は持てない。
わたしは毎日、携帯の着信音が鳴るのを祈るような気持ちで待っていた。けれど状況はなにも変わらなくて、どうしてあんなことを言ってしまったんだろう、って後悔ばかりが日ごとに募っていった。

祐樹と最後に話した日から十日後、追い出しコンパの前準備のために、四年生を除くサークルのメンバーでラウンジに集まった。と言ってもしなければいけないことは、今年卒業する先輩に宛てた色紙への寄せ書きと、コンパの日程を決めるための話し合いくらいで。それが終わったら、すぐに解散となった。
みんなが帰ってからも、わたしと秋穂はなんとなくラウンジに残っていた。普段なら学生であふれかえっているここも、春休みになればがらがらだ。
「そう言えば春佳、高橋くんとけんかしたの？」
窓際のテーブルについて、近況報告やとりとめのない雑談をしたあと、秋穂がふいにたずねてきた。
「なんで？」
「春佳のこと訊いたら、最近連絡とってないって言われたから。忙しいのかなって思ったんだけど、そういうわけでもないみたいだったし……なんか、いつもと様子違う気がしたし」
「ん……ちょっとね。距離を置いてる感じかな」
無理やり笑って答えると、秋穂は心配そうに眉をひそめた。
「なにかあったの？　あっ、話したくなければ、むりに話さなくて

いいしね」
　わたしはなにか答えようとして、だけど声が出てこなくてうつむいた。
「ごめん……いまはちょっと、話せないかも」
「いいよいいよ！　けど、春佳が話したくなったらいつでも聞くから、そのときは言ってね」
　秋穂があわてたように手を振って、わたしの言葉を制する。それから、いつものふわふわとした笑顔で言い足した。
「春佳と高橋くんが仲直りしたらさ。また、三人で飲みに行こうよ」
　わたしは、祐樹と秋穂がバイト先で過ごしてきた時間のことを知らない。
　ただ、わたしと祐樹が過ごしてきた日々が、そのわずかな時間に負けてしまったのかもしれないと思ったら、込み上げてくる感情を抑えられなくなった。
「ごめん、むりかも」
「え……あ、ちょっと、春佳っ」
　わたしはテーブルにひじをつくと、両手で顔を覆った。こんなところで泣くなんてばかみたいだって思うのに、自分の気持ちにはお構いなしに、涙は後からあとから頬を伝った。
「あたし、高橋くんと付き合いは短いけど……それでも話してて、春佳のことすごく大事に思ってるの、よくわかるよ。だから大丈夫だって」
　そう気づかってくれる秋穂の声はやさしくて、わたしはうなずくことしかできなかった。「祐樹はきっと、秋穂のことが好きなんだよ」って、そんな言葉を胸にしまい込んで。
　秋穂がもっといやな子だったらよかったのにって思う。
　そうじゃないから、わたしはこんなに苦しいんだろう。

8

ローヒールを履くと、わたしはバッグを片手に家を出た。三月に入っても相変わらず気温が低くて、吹きつける風は冷たい。今年の冬は例年よりかなり寒さが厳しいと、ニュースで報じられていたことを思い出す。冷えた手をコートのポケットに突っ込んで、わたしは足早に道を歩いた。

携帯で時刻を確認すると、待ち合わせの時間まではまだ余裕があった。

《突然だけど明日の昼ごろ会えるかな？
急な話でごめん（汗）用事があったら気にしないでね！》

そんなメールが届いたのは昨日の晩、お風呂を上がったくらいの時刻だった。

秋穂がこんなふうに、前日に誘いを持ちかけてくるのはめずらしいから、ちょっと驚いてしまった。それから、しばらく会っていない祐樹の顔が頭に浮かんで、いやな予感にとらわれた。

駅のホームに着いたとき、バッグの中で携帯が震えた。四回震えたところで、メールではなく電話の着信だと気がつき、あわてて携帯を手にとってひらく。ディスプレイに表示された名前を見た瞬間、きゅっと息が詰まった。

通話ボタンを押して、携帯を耳にあてがう。

「……祐樹？」

受話器ごしに呼びかけると、外から電話をかけているのか、ざわざわという雑音に混じって聞き慣れた低い声が返ってきた。

「ああ、久しぶり」

「うん……ほんとにね。最後に会ってから、もう一ヶ月以上経った

よね」
何回も自分から連絡を取ろうとして、だけどどうしてもできなくて……結局メールも電話もしないまま、もうだめなのかもしれないと思い始めた矢先の電話。嬉しさに不安やとまどいが入り交じって、胸がいっぱいだった。
「あのさ、突然だけど、明後日会える？」
祐樹がためらいがちに訊いてくる。わたしは、明後日の予定を記憶から掘り起こして答えた。
「うん、午後からは空いてる」
「じゃあ、いつもの駅で……一時でいける？」
「大丈夫。じゃあ、またそのときに」
「うん、また明後日」
電話が切れて、無機質な不通音が耳をすり抜けてゆく。わたしは携帯を閉じて、それをぎゅっと握りしめた。
ほうっとため息が漏れる。とくとくと鳴りやまない心臓の音でやっと、自分がとても緊張していたことに気がついた。
わたしは携帯をバッグにしまった。ほとんど同時に、電車の到着を告げるアナウンス。間もなくホームに滑りこんできた電車に乗ると、空いている座席に腰を下ろした。
祐樹、なにを話そうとしてるのかな。
考え出すと、悪い想像ばかりが頭を駆けめぐった。
――他に好きなひとができたから、別れようって言われちゃうのかな。
無意識のうちに、またため息がこぼれる。
向かいの車窓越しに見える空は、わたしの気持ちとは裏腹に抜けるような青色をしていた。

9

待ち合わせる約束をした駅に、秋穂はまだ来ていなかった。
構内の壁にもたれて、行き交うひとたちを眺めながら時間をつぶす。約束の時間を十分ほどすぎたとき、秋穂は改札口を出てきた。わたしの姿を認めると、小走りにやってくる。
「ごめんね、遅れて。コンビニのほうのバイトが長引いちゃって」
「ううん、わたしも来たばっかりだから大丈夫。どこ行く？」
「喫茶店でどうかな？　あたし、この辺でいいお店知ってるから」
「うん、じゃあそこに行こ」

秋穂に連れられて来たのは、大通りをそれてちょっと進んだところにある喫茶店だった。木造りを基調とした店内を、暖色の明かりが控え目に照らしている。カウンター席とテーブル席があって、その八割くらいはもう埋まっていた。
わたしたちは窓際にある二人がけのテーブル席についた。店員さんに渡されたメニューに目を通す。喫茶店としては、料理の種類はかなり豊富みたいだ。
「あたし、シーフードパスタにしようかな。春佳は決まった？」
「んー……どうしよ。そんなにおなか空いてないし、ケーキとコーヒーだけにしとこうかな」
注文をすると、それほど待たされることなく料理を出してもらえた。
小皿の上のアップルパイを、フォークで切って口に運ぶ。テーブルを挟んだ向かいでは、秋穂がゆっくりとフォークにパスタを絡ませていた。
いつもはおしゃべりな秋穂が、今日はなんだかおとなしい。突然誘いを受けたことも相まりそれが気になって、わたしはつい秋穂の

様子をうかがってしまった。けれどその表情からは、なにも読み取ることはできなかった。
アップルパイを食べ終わって、わたしはフォークを小皿に置いた。まだ食事中の秋穂を邪魔しないようにと、なんともなしに狭い窓の外へ目をやる。小さい子どもを連れた女のひと、仲良さそうに手をつないだカップル、携帯で通話している男のひと――
ふと、電話ごしに祐樹と交わした会話が思い出されて、わたしは口をひらいた。
「そうそう。今日ここに来る前、祐樹から電話かかってきたんだ」
ちょうどパスタを食べ終えて、ナプキンで口元を拭っていた秋穂が、すこし驚いたようにわたしを見る。
「へぇ、そうなんだ。……なんて言ってた？」
「明後日会おうって。なんなんだろうね、急に。ずっと連絡してこなかったのに」
苦笑して言うわたしに、秋穂はどことなく弱々しい笑みを浮かべて、
「でも、よかったじゃん。仲直りできるといいね」
それから水の入ったグラスに視線を落とすと、思い切ったように話を切り出した。
「あのね。春佳、高橋くんがバイトやめたこと知ってた？」
「……知らない」
思いがけない言葉に動揺しながらも答える。
祐樹とは長い間連絡がとれずにいたし、今日電話で話したときだってひと言もそんなことは教えてくれなかった。
「そっか、春佳も聞いてなかったんだ。あたしもやめるなんて全然聞いてなかったから……おととい知って、びっくりして」
秋穂はうつむいたまま、独り言みたいにつぶやいた。
「あたし、知らないうちに高橋くんに悪いことしちゃったのかな」
「なんで？」
「春佳には言ってなかったんだけど、高橋くん、バイトやめるちょ

っと前から急によそよそしくなって。最初は気のせいかなって思ってたんだけど……目が合っても、そらされる感じで」
「でも、なにもした覚え、ないんでしょ？　だったら気のせいだって」
秋穂の思い詰めた様子に、思わず口を挟む。そんなはずない、ってこころの中でひとりごちながら。
「……ほんとに？　ほんとに、そうかな」
秋穂はいつになく不安そうな表情で、テーブルに置いた自分の手元に視線を落とした。そして、ふるふるとかぶりを振る。
「ごめん、春佳に言うことじゃないよね、こんなの。ほんとごめんね」
わたしはなにも言葉をかけられなくて……ただ困惑することしかできなかった。
――どうして？　秋穂のこと、好きだったんじゃないの？

10

ひとの流れに従ってエスカレーターを上る。
改札を抜けてあたりを見渡すと、祐樹はすでに来て手持ち無沙汰にしていた。わたしは急いで祐樹のもとに駆け寄った。
「ごめん、待たせて」
「いや、俺が早く来すぎただけだし。とりあえず、なんか食べに行こうか」
「うん」
そう応える祐樹の様子は、以前とまったく変わりなかった。この二ヶ月余りのことは、全部夢だったんじゃないかって——祐樹が秋穂のことを好きだなんて、ただの勘違いなんじゃないかって思いたくなるほどに。
わたしたちは、駅に直結したショッピングセンターに向かった。
「祐樹、最近バイトやめたんだって？」
センターにつづく通路を歩いているとき、わたしはこの数日、ずっと気になっていたことをたずねた。
「あー、うん。やめた」
拍子抜けしてしまうほど、あっさりとした口振りで祐樹が答える。
「なんでやめちゃったの？」
わだかまりが晴れなくて、さらに質問を重ねる。祐樹は大した理由じゃないけど、と前置きをして、苦笑交じりに言った。
「考えてたよりしんどかったから、もっと楽なバイト探そうと思って」
「そうなんだ……」
最後に会ったあの日については、ふたりとも触れようとしなかった。代わりに、会っていなかった間の出来事についてたくさん話した。気まずい別れ方をしたあとだから、うまく話せるかどうか不安

に思っていたけれど、杞憂だったみたいだ。たわいのない会話が、今日はなんだかとても嬉しかった。

ショッピングセンターを歩きまわったり図書館に足を伸ばしたり、ファミレスでしゃべったりしているうちに、あっという間に日は暮れてしまった。

これまでの時間、いろんなものを瞳にうつしたはずなのに、記憶に残っているものっていえば、一番に思い浮かぶのは祐樹の笑顔やささいな仕草。すこしでも多くこころに刻みつけておきたくて、知らずしらずのうちにわたしは祐樹のことばかり見ていたのかもしれない。

川沿いの道を歩いているとき、祐樹は周囲に視線を走らせると、そっとわたしの身体を引き寄せた。そして、わたしたちは久しぶりにキスをした。嬉しいはずなのに、なぜかすこし胸がきしんだ。

唇が離れると、わたしは祐樹を見つめ、口をひらいた。

「祐樹……あのね」

祐樹はなにも言わずに、わたしの目を見つめ返してくる。

「秋穂のこと、どう思ってるの？　ほんとのこと、言って」

今日一日、ずっと訊こうと思っていて、だけど怖くて訊けなかったこと。

それを、やっと訊けた。

「元バイト仲間。……ほんとに、それだけだよ」

祐樹がわたしの頭をぽんぽんと叩いて、やさしく笑う。

大きな手の感触に、涙が出そうになった。わたしはぎゅっと口元を引き結んだ。これ以上言っちゃだめだって、このまま話題を変えれば、わたしたちはまた前みたいに戻れるって、思っているはずなのに。

「秋穂、言ってたよ。祐樹がよそよそしくなったって。知らないうちに悪いことしちゃったんじゃないかって、心配してた」

自分がどんな言葉を求めているのかもわからないまま、わたしは、

自分を追い詰めるような言葉をつむぎつづけていた。祐樹に向けているはずのその声が、遠くから聞こえてくるような妙な感じがしていた。
「いいの？　なにも言わないままで」
「……別になにもされてないよ。俺も、態度変えたつもりないし」
ぽつりと言って、祐樹が足元に視線を落とす。痛みを必死に押し隠しているみたいな表情で。
そんな顔、しないで。
自分のせいだってことも、矛盾しているってこともわかっているのに、わたしは泣きたいほどに強く願っていた。
「じゃあ、秋穂にはそう言っとく」
わたしが笑いかけると、祐樹もちょっとだけ笑ってくれた。
それから、わたしたちはなんとなく無言になって、夜道を歩いた。駅の構内に入ると、切符を買って改札を抜ける。わたしたちが乗るのはそれぞれ違う方面に向かう電車だから、ここで別れなければならない。
「じゃあね」
「それじゃ、また」
軽く手を振って、わたしたちは別れた。
エスカレーターに向かう途中で後ろを振り向くと、反対側のホームにつづく階段へ向かう祐樹の姿が見えた。
こっちを見ないかな、なんて思いながらその姿を見ていたけれど、最後まで祐樹が振り返ることはなかった。祐樹の姿が見えなくなると、わたしはきびすを返してエスカレーターに乗りこんだ。

11

ドアの脇に立って電車に揺られながら、いろんなことを思い出していた。
ひとりで道を歩いてゆく秋穂を見送っているときの、そして秋穂のことが好きかってわたしが訊いたときの、どこかつらそうな祐樹の表情。
いつも笑っている秋穂の不安げな、いまにも泣き出しそうな顔。
記憶のかけらが、頭をかすめては消えてゆく。
わたしはため息をひとつついて、バッグから携帯を取り出した。
ホームで電車を待っているときに打ったメールをひらくと、電話帳からアドレスを引っ張って、送信する。

《祐樹に会ってきた！ちゃんと仲直りできたよ（^＿^）
祐樹、別に秋穂のこと避けたつもりないみたいだよ。
あの人基本的に無愛想だから、気にしないであげて（笑）》

秋穂にしてはめずらしく、すぐに返信が来た。ひと呼吸置いてメールをひらく。

《仲直りできたんだね、よかった（＊^＿^＊）
どうなってるのかなって、実はずっと気にしてたんだよ～（笑）これからは仲よくしてなきゃだめだよ。
あたしが前言ったことも…不安だったから、それが分かってすごくほっとした！
教えてくれてありがとね♪》

わたしはぱたんと携帯を閉じた。

自分がどうすればいいのかなんて、わかっている。けれど、それを実行にうつすのはとても怖かった。
また携帯が震えた。受信ボックスをひらくと、祐樹の名前が目に飛び込んでくる。いつものことだけれど、件名にはなにも書かれていない。
指先が小さく震えた。
別れたすぐあとに祐樹がメールを送ってくることなんて、めったにないのに。秋穂のこと？
いやな方に想像がふくらんで、心臓の鼓動が早まっていった。ボタンを押そうとする指がこわばって、なにもできないまま携帯の画面を見つめる。
車内に響き渡るアナウンスで、はっと我に返った。電車が徐々に減速してホームに滑りこむ。向かいのドアがひらいて、座席を埋め尽くしていた乗客がぞろぞろと降りてゆく。この次に停車するふたつ先の駅が、わたしの降りる駅だ。
わたしは携帯を握りしめると、思い切って祐樹からきたそのメールをひらいた。

《お疲れ。
今日、少し元気なかった？気のせいならいいんだけど、なんとなくそんな気がして。》

文面を見た瞬間、身体中から力が抜けるのがわかった。ドアに身体を預けて、ぼうっとディスプレイを眺める。
――確かに、ふとした瞬間に秋穂のことを考えてしまって、塞ぎこんでいたかもしれない。
祐樹が気遣ってくれたことが嬉しくて、すこし悲しかった。
わたしは返信画面をひらいて、ゆっくりと文字を打った。

《気のせいだよ～。全然大丈夫。心配してくれてありがとう（＾－

＜＊）≫

携帯を閉じてバッグにしまい、ガラスの向こうを見た。
夜の町が窓の外を流れてゆく。
白くひかる三日月の下、ネオンや建物の窓から漏れた明かりが町を彩っていて、それがとてもきれいだと思った。きらきらした光は、だんだんとにじんで、ぼやけていった。

12

「ほんと、急にあったかくなったよね」
「そうだな」
「ここに来るの、すごいひさびさ」
わたしたちは肩を並べて、公園の歩道を歩いていた。
園内にはやわらかく日が差して、まわりの景色を包みこむように照らしている。
「でも、なんで突然、公園に行きたいなんて言い出したんだよ」
そんな祐樹の声に、後ろからの甲高い声がかぶさった。
まだ小さい女の子がふたり、じゃれ合いながらわたしたちを追い抜いてゆく。年齢差があるみたいだから、姉妹かもしれない。
「うーん……なんとなく。祐樹、前にふたりでここに来たときのこと、覚えてる？」
「……覚えてるよ」
まぶしそうに目を細めて、祐樹が笑う。わたしもつられて顔をほころばせた。
この公園は、わたしたちが初めてデートしたときにも来た場所だ。ベンチに座ってどうでもいいようなことばっかりしゃべって、付き合う前とやってること変わんないね、なんて笑い合ったのを昨日のことみたいに覚えている。

厳しい寒さがとどまっていたこの町にも、確実に春はやってくる。
風の冷たさはやわらいで、公園の桜は蕾がふくらみ始めた。じきに薄桃色の花があたりを埋めつくして、園内は花見客でいっぱいになるだろう。
「やっと、春がきたって感じだね」
わたしの言葉を受けとめて、祐樹が言う。

「春佳の好きな季節だな」
「うん。大好き」
わたしは隣にいる祐樹を盗み見た。祐樹は歩道沿いの桜を見上げている。
きっと、隠し通せていると思っているんだろう。秋穂のことが、いまも好きだってこと。気持ちが抑えきれなくなる前に、バイトをやめてしまったこと。
でも、気づかないはずない。高校生のときからずっと、わたしは祐樹だけを見てきたから。
「祐樹」
「ん？」
小さく息を吸いこむ。それから……言葉が継げなくなって、かぶりを振った。
「……なんでもない」
わたしは祐樹の手に自分の指を絡ませると、腕をちょっとゆすって笑ってみせた。
「なんだよ」
祐樹は呆れたみたいに笑うと、力を込めてわたしの手を握った。

まだ枝が寒々しい桜に、去年、そして一昨年に祐樹と見た、満開の花を咲かせた桜を重ね合わせる。付き合い始めてすぐに見た桜も、その一年後に見た桜もとてもきれいで、祐樹の大きな手があたたかかった。
同じ道を歩くことができなくなっても、しあわせだったあの時間が消えてしまうわけじゃない。

だから、桜の花が咲きほこるころになれば、わたしはきっと言える。
――二年間とてもしあわせだったって、自分の気持ちを殺さなくていいよって、笑って言えるから。

それまでどうか、もうすこしだけ待っていて。

わたしたちのそばを、家族連れが楽しそうにおしゃべりしながらすれ違う。男の子のはしゃぎ声、お父さんとお母さんの笑い声。

それにひかれて、なんとなく後ろを振り返ったわたしの髪を、風がやさしく揺らしていった。

１２（後書き）

三角関係にしてはきれいすぎるかな？　とも思うのですが、個人的には「きれいすぎる」お話ってちょっと好きだったりします。せっかく自分の自由につくり出せる作品、そんな世界があってもいいかなぁと……。

この時期に完結させられて嬉しいです。

最後までお付き合いくださり、ありがとうございました＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5339r/

桜の花が咲く頃に

2011年3月29日08時25分発行